絶対的自由への希求

永田　浩三著

奄美の奇跡

「祖国復帰」若者たちの無血革命

復帰運動を支えた強烈な生まれ育った土地への愛

金平　茂紀

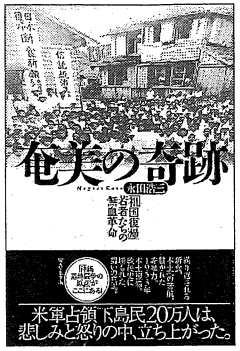
奄美群島は、小笠原や沖縄とともに、敗戦とともに米軍に占領され、1951年のサンフランシスコ講和条約締結によって、日本が占領から脱して独立するのと引き換えに、日本から切り離された悲しい歴史をもつ。米軍政のもとで、奄美群島では島民による激しい本土復帰運動が続けられた。軍政は民主主義とは対極にある政治システムである。言うまでもなく、奄美群島は1947年に施行された日本国憲法も適用されない地域だった。本書はその奄美の地において、米軍政のもと、島民らが、命がけの密航の企てや、まるで血判状のような署名運動の断行、子どもたちまで参加したハンガーストライキの決行、弾圧をかいくぐっての集会開催といった、文字通りの草の根かつ非暴力を貫いた島民たたかいを綴った労作である。その運動がどのように弾圧され、またどのように弾圧に打ち克ち、さらにどのように成果が結実したのかを、実際に運動を担った人々からの聴き取りと広範な文献調査、現地に実際に足を運ぶフィールドワーク等の作業によって綴られている。当時の運動の息吹が伝わってくる。

ほど民衆の声がいきいきと活写されている。運動の中心人物だった中村安太郎、村山家國、泉芳郎といったそれぞれ個性に溢れる人物像が実に魅力的に描かれている。特に奄美の賢者と言われた中村安太郎の魅力、筆者の引用する中村の「世の中は変えられる」「理知的たれ」といった言葉のちからが島民を魅了していった過程が面白い。結局、奄美群島は1953年8月のダレス声明によって同年12月に本土に復帰する（トカラ列島はそれに先だって前年の2月に本土に復帰していた）のだが、その際の復帰運動内部の分裂が痛ましい。瀬長亀次郎らとの復帰運動での連携を保っていた人民党勢力が一掃されて、奄美の復帰を最優先する現実主義が台頭する。裏を返せば沖縄と一緒にやっていては奄美の復帰は果たせないという判断がはたらいたのだろう。

それにしても奄美群島の力強い復帰運動を支えた基盤は何だったのか。本書から汲み取れるのは、社会主義思想の受容（とりわけ中村安太郎の活動や奄美の地下共産党運動にみられる）と、アナーキズム的な反中央意識だ。筆者の永田氏が紹介しているあるエピソードがある。アナーキスト大杉栄の虐殺後、大杉を悼む碑が奄美群島のある孤島に有志らによって秘かに作られていたというのだ。永田氏はこれを「復帰運動の源流」と位置づける仮説を立てている。そのような絶対的自由への希求の精神が奄美群島には存在していたというのは実に興味深いところだ。だがそれにもまして僕に強く感じられるのは、島民たちの島を愛する、地域を愛する「共同体主義」とでも言ったらいいのか「郷土愛」とかいう陳腐な言葉を超えるような強烈な生まれ育った土地への愛だ。本土に密航した島民らは奄美を愛し続け、本土から復帰運動を支えた。

テレビ報道という仕事を1977年に僕が始めてからも、僕のおぼろげな記憶のなかでは、奄美の人々が沖縄の人々と手をたずさえて反CTS闘争をたたかっていた事実がいまだに鮮明だ。また「無我利道場」というコンミューン運動のいわば「まつろわぬ民」の存在も忘れられない。今はどうなっているのだろうか？

末尾に、本書に描かれている奄美の高校生たちの体を張った復帰運動でのたたかいを読んで、今現在のこの日本でも動き出した高校生たちの姿がだぶってみえたことを記しておく。（かねひら・しげのり氏＝テレビ記者・キャスター）



四六判・336頁・1700円
ＷＡＶＥ出版
978-4-87290-752-0

★ながた・こうぞう氏は武蔵大学教授・ジャーナリスト。ＮＨＫ入社後、ディレクター、プロデューサーとして「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代」などを制作。著書に「ベン・シャーンを追いかけて」「ＮＨＫと政治権力」ほか多数。一九五四年生。